

タットヴァサングラハにおける異 viśeṣa 句義批判

菱 田 邦 男

タットヴァサングラハにおいては、當時の種々なる哲學説に對して佛教瑜伽行派の立場から批判がなされているのであるが、その中に六章にわたつて勝論派の六句義説に對する批判がなされている。本論ではその中のヴィシエーシャの章 viśeṣa-parīkṣā のみをとあげて、勝論説の中のヴィシエーシャに對する批判を理解してゆきたい。(ヴィシエーシャの章は第813偈から第822偈までであり、以下文中のカッコ内の數字は偈の番號を示す。)

—

勝論哲學においては、ヴィシエーシャ (viśeṣa 漢, 異=特殊) は句義 padārtha の一つであり、原子 (paramāṇu 漢, 極微), 虚空 ākāśa, 時間 kāla, 方角 diś, 我 ātman, 意 manas という常住なるドラヴィヤ (dravya 漢, 實=實體) に存してそれらの各々について區別の觀念を生ぜしめる原因であるといわれている。原子等の常住なるドラヴィヤはいずれも究極的なものであるから、それらに存しているヴィシエーシャはアティアンタ・ヴィシエーシャ atyanta-viśeṣa 又はアンティヤ・ヴィシエーシャ antya-viśeṣa, 即ち究極的ヴィシエーシャ (漢, 邊異) といわれている。又勝論派では原子等の常住なるドラヴィヤ相互間の區別の認識は優れた修行者によつてなされ得るとしているが、この際修行者が原子等の各々のドラヴィヤにおける區別を認識し得るのは、その原因としてヴィシエーシャが存していて修行者にその認識を生ぜしめるからである、と考える。

タットヴァサングラハは先ず冒頭において、ヴィシエーシャの依り所であるドラヴィヤがすでに前のドラヴィヤの章 dravya-parīkṣā において否定されていることを指摘して、これにもとづいて、ドラヴィヤに存するヴィシエーシャの實在性をも否定している。即ち、ヴィシエーシャは常住なるドラヴィヤに存するものであると勝論派では説かれているが、常住なるドラヴィヤの全く存し得ないこと

はずで論證されているから、そのようなドラヴィヤに存して區別の觀念を生ぜしめる原因となつてゐるヴィシェーシャの存在性も當然否定されなければならない、と主張する。(813)

以上はヴィシェーシャに對する根本的批判であるが、タットヴァサンクラハでは更に種々な角度から反駁が進められる。即ち、一體原子等のドラヴィヤは本來別々なものとして存在しているのか、それともその反對に無區別なものとして存在しているのか、ということが問われなければならない、とタットヴァサンクラハは主張する。そこで若し本來別々なものとして存在しているならば、それらは本來別々に存在しているのであるから、修行者がヴィシェーシャの助力によつて區別の觀念を生ずるとみなすことは無用な議論である、と決めつける。(814) 一方原子等が本來無區別なものとして存在しているのであるならば、たとえヴィシェーシャという特別な句義の助力を得ても本來不可分に結合しているものは如何ともなし難いはずである。にも拘わらず修行者に區別の觀念が生ずるとすれば、その認識は明らかに誤りであり、又その修行者は非存在のものに存在性を認めることになるから僞の修行者である、と攻撃する。(815)

ここで論點がドラヴィヤからヴィシェーシャに移されて反駁が續く。即ち、タットヴァサンクラハは次のように言う。若しヴィシェーシャという特別な句義 *padārtha* が無ければ區別の觀念は生じ得ないとするならば、それでは更にヴィシェーシャ自身に關する區別の觀念の原因は何か。つまり、ヴィシェーシャが區別の觀念の原因として存する以上は、そのヴィシェーシャ自身に關する區別の觀念も更に他のヴィシェーシャをその原因とせねばなるまい。ところが汝等勝論派の説による限りでは、究極的なヴィシェーシャにはそれ以上他のヴィシェーシャは結びつかないはずである。若しヴィシェーシャに更に他のヴィシェーシャが結びつくとなれば無限溯及の過ちに陥ることになり、従つて常住なるドラヴィヤに存し、それ自身究極的であるというヴィシェーシャの定義に反することになる。即ち、究極的なヴィシェーシャに更に他のヴィシェーシャが結びつくということは、先ずヴィシェーシャはドラヴィヤに結びついているという第一の定説に反し、次にヴィシェーシャは究極的であるという第二の定説に反することになる、と論破する。

ここで勝論派からの應酬が挿入される。即ちヴィシェーシャはそれ自身に關しても區別の觀念を生ずることが可能であるから自己以外の他の原因に依る必要はない、と。しかしこれに對してもタットヴァサンクラハは次のような論破を試み

る。若しヴィシェーシャには自己自身に関する区別の觀念を生ずる力が存するならば、原子等にも自己自身に関する区別の觀念を生ぜしめる能力が本來備わつていていいはずである。尤も、これに對し勝論派は、「原子等には各々區別される形質 *mūrti* が存するにも拘わらず、原子等自身には自己自身に関する区別の認識を生ぜしめる原因となる能力が存することは認められない。しかし一方のヴィシェーシャにはその能力が存する」という辯明を行うかも知れないが、そのような辯明はナンセンス以外の何ものでもない、とタットヴァサングラハは一蹴する。(816)

二

さて、これに對する勝論派の辯明としてブラシャスタマティ *Praśastamati* の説が引用されている。ブラシャスタマティは次の如く言う。

例えば犬の肉等は本來不淨なものであり、その犬の肉と結びつくことによつて他のものも不淨になり得る。ヴィシェーシャと原子等の關係も丁度これと同様であつて本來的に區別の觀念の原因たるの性質が備わつているのは究極的なヴィシェーシャに於てであり、そのヴィシェーシャと結合することによつて原子等にも區別の觀念が生ずる、と。(817) 更に、例えば瓶等の認識において、瓶等はそれぞれ独自の性質を持つているが、その認識は本來的に照明能力を持つ灯火という照明者の助力によつてはじめて生ずる。一方逆に灯火の認識は瓶等によつては生じない。丁度この場合と同様に原子等に存する區別の觀念はヴィシェーシャの助力によつて生じ、一方ヴィシェーシャ自身に関する區別の觀念の原因は本來的なものである⁽¹⁾、と。(818)

しかしこれらの例證をタットヴァサングラハは次のように言つて反駁する。先ず犬の肉の例について言えば、あるものが不淨であると清淨であるとかいうことは絶対的ではない。というのは、淨とか不淨とかいうことは本來的なことではなく單に分別(思惟作用)の所産 *kalpanôparacita* に過ぎないからである。例えば犬の肉等はヴェーダを學ぶ人達にとつては不淨なものとして感じられるが、一方卑しい人達にとつては清淨なものとして感じられる。故にこのような犬の肉という一つものにして不淨とか清淨とかいうような對立した見方が生ずるような例は決定性が無いから不適當である、と反駁する。(819) タットヴァサングラハは更に反駁を續ける。一步ゆずつて、實際において不淨性が存することもあるかも知れないとしてみよう。しかしたどえそらだとしても汝のあげた例は確證として

相應しくない。何となれば食物等が犬の肉等の不淨なるものと結びつけば、なる程以前の清淨なる性質を失い、偶有的 *parōpādhika* に他の不淨なる性質を持つようになるであろう。ところが原子等には偶有的に區別の觀念が生ずるような結びつきは全く存しないはずである。何故ならば原子等は常住であるから決して變化するということがないからである。(820) 又灯火と瓶等との例についても、成る程瓶等は灯火の影響力によつて、その個別性が認識されるかも知れないが、この例も適當ではない。何故ならば灯火によつて瓶等に生ずる個別性の認識も、やはり偶有的に過ぎないし、又瓶等は無常なるものであるから、常住なる原子等に關する例證として用いることは不適當である、と攻撃するのである。(821)

以上の理由でヴィシェーシャの實在性はここに否定されるのであるが、では一體區別の觀念は如何にして生ずるのであるかということに關しては、タットヴァサングラハの説明は極めて簡略であり、ただ次のように述べている。「區別の觀念は今問題となつているヴィシェーシャの力によつて生ずるものではない。樂等の如く[刹那的に]連續して生ずるからである。(822)」

(1) プラシャスタマティ (*Praśastamati*) の説は「タットヴァサングラハ」の中に數回引用されているが、彼の年代は不明である。彼は恐らく正理派に屬する學者であろうといわれているが「パダールタダルマサングラハ」の著者、プラシャスタパーダ (*Praśastapāda*) とは別人のようである。(中村元著「初期のヴェーダーンタ哲學」p. 375 参照) ところで、本節において注釋者カマラシーラがプラシャスタマティの説として引用している例證がプラシャスタパーダ著「パダールタダルマサングラハ」の異句義 (*viśeṣa-padārtha*) の章において説かれているものと文意、文體に關して大體一致していることは興味深いことである。參考までに兩者を列舉してみると次の如くである。

(A) *yathā śvamāṃsādīnām svata evāśucitvaṃ tad-yogāc cānyeṣāṃ tathēhāpi tādātmyād-antyeṣu viśeṣeṣu svata eva vyāvṛtti-pratyaya-hetutvaṃ tad-yogāt paramāṇuṣu/* (*Tattvasaṃgraha* 第817偈釋)

yathā gavāśvamāṃsādīnām svata evāśucitvaṃ tad-yogād-anyeṣāṃ tathēhāpi tādātmyād-antya-viśeṣeṣu svata eva patyaya-vyāvṛtṭiḥ tad-yogāt paramāṇv-ādiṣv iti/ (*Padārthadharmasamgraha* p. 322, *Vizianagram S. S.*)

(B) *yathā ghaṭādiṣu pradipāt natu pradipeṣu ghaṭādibhya iti/* (*Tattvasaṃgraha* 第818偈釋)

yathā ghaṭādiṣu pradipāt na tu pradipe pradipāntarāt/ (*Padārthadharmasamgraha* p. 322)